堺市立中央図書館蔵『源氏余編』

—『雲隠六帖』（二類本）新出伝本の紹介と翻刻（二）—

小川陽子
OGAWA Yoko

［キーワード Keyword］　『雲隠六帖』、中世王朝物語、『源氏物語』、物語享受史
［所　属 Institution］　岐阜大学教育学部（Faculty of Education, Gifu University）

［要　旨 Abstract］　『源氏物語』の続きを描いた物語のひとつである『雲隠六帖』の新出写本を紹介、翻刻する。従来、『雲隠六帖』二類本の現存本は、七伝本が知られるに過ぎなかった。しかし、調査の結果、堺市立中央図書館蔵『源氏余編』もまた『雲隠六帖』二類本であることが明らかとなった。前稿では当該本の書誌その他の報告と、雲隠・巣守両巻の翻刻を行った。本稿はその続稿として、『雲隠六帖』二類本における堺市立中央図書館蔵本の位置付けを明らかにし、桜人・法の師・雲雀子・八橋巻の翻刻を行うものである。

『雲隠六帖』の現存伝本は、二種に大別される。版本とそれを書き写した伝本群である一類本（流布本・普通本とも）と、写本のみの伝本群である二類本（別本・異本とも）である。両者の間に基本的な物語展開の相違はないが、細かな描写や作中和歌に関してはさまざまな違いがある。(1)

このうち二類本については、従来、次の七本が知られているに過ぎなかった。以下、本稿では（　）内の略称を用いる。

名古屋市立蓬左文庫寄託堀田文庫蔵本（蓬左本）
愛知県立大学図書館蔵本（愛知本）
立花和雄氏蔵本（立花本）
早稲田大学図書館九曜文庫蔵本（九曜本）
内閣文庫蔵本（内閣本）
天理大学附属天理図書館蔵本（天理本）
早稲田大学図書館玉晁文庫蔵本（玉晁本）

これらに加えて、堺市立中央図書館所蔵『源氏余編』（以下、堺本と呼ぶ）もまた、現在の外題こそ異なるものの『雲隠六帖』二類本に他ならないことが明らかとなった。

前稿（2）では、堺本の書誌および作品名（3）を中心とする解題を記した上で、雲隠・巣守両巻の翻刻を行った。本稿では、二類本諸本における堺本の位置付けを確認するとともに、桜人・法の師・雲雀子・八橋巻の翻刻を行う。

二類本諸本の相互関係については旧稿（4）で検討し、蓬左本が大きな誤脱を含まない唯一の伝本であるものの細かな点では誤写誤脱が見られることから、今後は蓬左本をまず第一に用い、細かい点で他本をも参照するべきであると述べた。これに対し堺本は、前稿で記したとおり、

右有馬越中入道徳円御／本以書写者也／元和四年三月三日

という蓬左本・天理本と共通する奥書を有し、二類本の最善本と思われる蓬左本と近しい関係にあることが明らかである。そこで、まずは堺本と蓬左本とを比較すると、堺本には比較的大きな誤脱が二箇所認められる。

①堺本　ちゝ君のしはしかほと六條の院の御心をなやましたてまつりしむくひにやとまておもひしらせたてまつりしそ（二四ウ）
蓬左本　ちゝ君のしはしか程六條の院の御心をなやましたてまつりしむくひにやとまて**思ひ**われも又まのあたりに**おもひ**しらせたてまつりしは（二一ウ）

②堺本　おほやけもさなからたのみたてまつらせ給ふ事なり世をも人をもうらむる御心にてこそさる御さまにもなり給へは（三三オ）

蓬左本　おほやけもさなからたのみたてまつらせ給ふなり又かの御かたさまそのおりはよろつに世をも人をもうらむる御こゝろにてこそさる御さまにもなり給へは（二八ウ）

いずれも蓬左本の傍線部を堺本が欠いていることがわかる。①は、ゴシック体で示した「思ひ／おもひ」の目移りによる誤脱であろう。②は、おそらく親本が一行十七文字前後の字詰めで記された写本であったのを、一行分誤脱したのではないだろうか。なお、前述のとおり奥書から同系統と考えられる天理本は、①②ともに蓬左本と同様の本文を持つが、一方で天理本のみに認められる比較的大きな誤脱が五箇所見受けられる。(5) よって、堺本と天理本との間に書承関係はなく、堺本のほうがより損傷の少ない伝本であるといえよう。

さて、堺本は、右のような比較的大きな誤脱のほかに、細かな誤写誤脱も見受けられる。本稿で翻刻した巻から任意に挙げてみる。

③堺本　ひとりはつかしくさとり給へは（二四ウ）

蓬左本　ひぢりはつかしくさとり給へは（二一オ）

聖が恥ずかしく感じるほど立派に悟っていらっしゃる、と語る箇所であるので、堺本「ひとり」は誤写と見なされる。

④堺本　少将の君むかしおほゆる御けはいとなつかしけにて（三六ウ）

蓬左本　少将のきみむかしおほゆる御けはいいとなつかしけにて（三一ウ）

おそらく本来は「御けはひいと」とあるべきところ、蓬左本は「ひ」が「い」となり、さらに堺本は「い」をひとつ誤脱したものと考えられる。あるいは親本が「いゝ」となっていたところ、踊り字を落としたのかもしれない。

⑤堺本　日暮いたうふりしに左衛門かみかみつからひとりにもつもる雪かなといへるを（三七ウ）

蓬左本　日雪いたうふりしに左衛門守時重（督歟）かみつからひとりにもつもる雪かなといへるを（三二ウ）

堺本は「暮」とあるが、波線部「つもる雪かな」とあるとおり、「雪」とあるべきところ。なお堺本は、蓬左本の二重傍線部、左衛門督の名「時重」も落としている。

右のような堺本のありようから、やはり現存諸本においては蓬左本を第一に用いるのが適当と判断される。

一方で、蓬左本にも誤写誤脱と思しきものは散見する。

⑥堺本　あはれなきかおほくもなとうちすんして（二五オ）

蓬左本　あわれなきかなおほくもなとうちすんして（二一ウ）

ここは「世の中にあらましかばと思ふ人なきがおほくも成りにけるかな」（拾遺集・巻二十・哀傷・一二九九　藤原為頼）を引く箇所であるので、堺本のように「なきかおほくも」とあるのが本来の形と思しい。蓬左本「なきかなおほくも」は二重傍線部「な」が衍字であろう。

⑦堺本　うへまことやかのうせにし人もとめ出給ふとな（二三ウ）

蓬左本　うへ（歟）うんまことやかのうせにし人もとめ給ふとな（二〇オ）

匂宮と薫の対面場面、帝となった匂宮が「まことや」云々と薫に話しかける様子が語られる。このため、ここは堺本のように「うへ」（上）とあるのが適切で、蓬左本は「へ歟」と傍書のあるとおり誤写と判断される。このように蓬左本は傍書によって誤写の可能性を指摘する箇所がまま見受けられるが、堺本の当該箇所は基本的に誤写のない本文となっている。やはり蓬左本と堺本との間に書承関係はないと見てよいだろう。

以上のことから、『雲隠六帖』二類本を読んでいくにあたっては、これまでどおり蓬左本を主とし、その不審箇所について今後はまず堺本を確認するのが望ましいと考えられる。蓬左本の翻刻および堺本以外の諸本との対校は拙著 (6) に収載済みである。あわせ参照されたい。

（注）

（1）拙著『『源氏物語』享受史の研究』第二章（二〇〇九年、笠間書院）

（2）拙稿「堺市立中央図書館蔵『源氏余編』—『雲隠六帖』（二類本）新出伝本の紹

介と翻刻（二）—」（『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』第69巻第2号　二〇二一年三月）。以下、「前稿」と呼ぶ場合はこれを指す。

（3）この物語は本来、「雲かくれ」以下、各巻の名のみが付されていたのであろうと推察した。前稿では『雲隠六帖』の内容および『源氏物語』に対する態度から述べたが、そもそもは『源氏物語』の伝本が各巻名を外題としているところに由来していよう。「桐壺」「帚木」ほか各冊ごとにその巻の名を外題とする『源氏物語』のあり方を踏襲し、いかにも『源氏物語』の一部らしくあろうと巻名のみを付したのが『雲隠六帖』の本来の姿であったと考えられる。

（4）前掲注（1）拙著第二章第二節。なお、蓬左本以外の六本については、拙稿「『雲隠六帖』伝本研究—別本系統諸本の相互関係について—」（『国文学攷』第183号　二〇〇四年九月）にて検討を行った。

（5）前掲注（4）拙稿「『雲隠六帖』伝本研究—別本系統諸本の相互関係について—」

（6）前掲注（1）拙著

翻刻　堺市立中央図書館蔵『源氏余編』桜人～八橋巻

※凡例は前稿に同じ

さくら人

うちの御かとはかくおほえぬよのさかへ
なとにつけてもむらさきのうへの御こと
わするゝ世なくあはれおはします世なり
しかはいかにかひあるさまに見あつか
ひ給はまし御子あまたおはする中にも
一ほんのみやとまろをはえなきもの
におもひたまひしものをなとからくれ
なゐもふり出つゝおもひ給ふ比し
も御夢にいさゝかむかしにかわるけし（二一オ）

きもなくことにいつくしきけはいに
おはしを見をきたてまつりしか
うしろめたくて我もひまあるに
つけこのあたりをさらすまほりたて
まつるかひありておもふさまなること
いとうれしくなんとてなつかしけに
きみかあたりさらぬかゝみのかけそひて
くもりなき世を見るそうれしき
との給ふをいまた世におはしけるも
のと御袖をひかへんとするとおもひて（二一ウ）
さめ給ひけれはいとかくかひなく夢の
うちにもことはをかわすなりにし事
あかすくちおしくまことにいはけなく
てわかれたてまつりしを夢にもさ
もうつくしうらうたけなりしおも
かけわすれかたく夢としりせはと
かへす〳〵なこりも戀しうまか〳〵しけれ
ともふちつほのきさきかの御おも
かけに通ひ給ひけりととし比も
おもひわたりしかともふんみやうなら（二二オ）
さりしかゆめのうちからいとよくこそお
ほえ給へと一しほなつかしくやかて
ふちつほへおはして見たてまつり給
へは二の宮のいとうつくしうおよす
け給ふをあひしたてまつり給ふと
ころに音なくてうへのおはしけるを
いとはつかしくおほしておもてあかめて

おはするさまのいつとなくわかくらう
たう御子たちあまたのおやといはん
もいたはしき心ちしてうちまほり（二二ウ）
給ふをわりなくおもほしてはちらい
たまひたる御けはいいはんかたなく見
たてまつり給御ことめしよせてもろと
もにあそはしおはする折しもうちの
おとゝまいり給ふと人申ければやかて
こなたへとてれいのへたてなくみす
のうちに御ましよそひていれたてま
つるむかしものかたりなといとこまかに
きこえ給ふかたみにあさからぬ御
なからひなからしたにはおもひむす（二三オ）
ほれ給ふ事もやありけん御心のうち
ともはしらすかしうへまことやかのうせ
にし人もとめ出給ふとないまはさり
とも心なおひ給ひてむかしいと心
おさなくてさるましきことをおも
ひそめて我も人も心をつくしはん
へりしおもへはたゝこゝなる人の
ふかくかくし給ひしかつらふいかゝ
してその人としるわさもかなと
心をはけましし比しゝうかまたわ（二三ウ）
らはにてかれよりの文とてもてき
たるをたゝとりにとりて見そめ
てよりさる心もいてきしそかし人
にさのみ物かくしはすましき物に
こそなとそのよのとかはさなから
へたてすいふになんゆるし給へなと
いまも涙くみつゝあはれつきせす
の給へはおとゝはわかくきひはにお
はしましし時さへ心ふかくはつかしけに
おほろけにておもふことをもうち出給（二四オ）
はぬをまして此比となり給ひては
いとゝ世のことわりにとりそへよきあ
しきにつけいにしへのおかしか此世
のつみかなとまてひとりはつかし
くさとり給へはさやうなりし事とも
うしとも思ひはて給はすちゝ君の
しはしかほと六條の院の御心をな
やましたてまつりしむくひにてとまて
おもひしらせたてまつりしそとおもひ
給へはいさゝかつらき心も残らす何か（二四ウ）
その過にしことを二たひの給ひ出へき
みな何事もさるへきに侍らめなと
の給ひてはて〳〵はむかしのその人か
の人の物のねのいとすくれたり
し事ともの給ひ出てあはれな
きかおほくもなとうちすんしてけふ
なんむかしおほゆる御物語によろつ
のうれひもわすれてなくさみ侍り
きいままたかゝらんおりにとそうし
おきてまかて給ひたるにも此（二五オ）
おとゝのむかしより后にはあやしき

まていとこそたのもしう中〳〵のはら
からなとよりもうしろやすく見え
給ひしかいかに折〳〵まろをあわつ
けしと見らるらむと見ゆる時もそゝろ
に心つかひせらるゝ人の心さまに
こそなとしりうこち給ふに御せん
のおとなしき人〳〵さもいつとなく
あさやかに心ふかけにおはするおとゝ
かなとくち〳〵にしのひつゝいふも（二五ウ）
ねたきまてそきゝおはすおとゝは我
身のいまめかしくなりまさり給ふに
つけてもむかし山里わすれ給ふ事
なく八月はうはそくの宮の御き月
神無月はしゆしやくの御き月霜月
はかのあけまきの御ためうちつゝ
き御はつかうの事なとのゝしりける
にもありかたき御こゝろのほとをも
おもきためしにそあつかひたてまつ
りけるひたちのかみも此おとゝの（二六オ）
御いきほひにていまはやまとのかみ
とそいひけるきたのかたむかしはいと
あなつらわしけなりしをいまはいき
ほひことになりてかの御しうとめ
なといはんもかたはらいたしとてお
わしますきたのまちにいかめしき
とのつくらせてそすませ給ひけるや
まとのかみもこゝろやすくおる所なと
にもあけすつかひ人のつらのやう
にてもてなしける三条のうへし（二六ウ）
せんかたたかへなとにおはしけるゆへ
なり左近の少将は四十あまりに
なりけれともたゝむかしの少将に
てそありけるはるかおとりと見え
しこきみいまた二十はかりなりけれ
ともかの御いきほひにてさいしやうの中将
なといひていと物〳〵しき殿上人
にてそありけるいまそやまとのかみ
も少将もむかしの事くやしくく
ちぬこかねとはおもひけるその年（二七オ）
の二月むらさきのうへのかたみの
桜さかりなりときこしめして行
幸ありけになへての花の色に
もわすめつらしきさまに見えけ
れはちりなん後のなとすんし
給ひて

露の身のきゆるかたみに花をえて
見るたひことにあわれ世の中

うちなかめてくるゝもしらすむかしの
こと物にもかなやとなかめ入ておは（二七ウ）
する花の陰よりありし夢のおも影
さと見えて

あたし世と思ひなはてそさくら人
ちるてふことは世のしめしなり

釈尊ねはんにいり給ふといふ事

もたゝ世のありさまをしめさんため
なりわれもまたそのことくなりしやうは
是しのはしめ是佛道のかとて人
間無跡の夢一たひちんしんをうかへ
てなんそこくらくのこかねのうてなに（二八オ）
しやうせさらんやゆめ〳〵たかきくらゐに
御心とゝめ給ふなとつふ〳〵と花の
もとよりしめされ給ひて
　もとよりも生れてこねはいまも又
　たつね行へきふる里もなし
しやうじなむそ道をわかんくう〳〵
くうじやく〳〵じやくとて是をもとゝ
してそつゐにわうしやうのそくわい
をうけ給ふと云々（二八ウ）

法のし

うちのおとゝは月日にそへて此世を
いとひ給ふ心のみふかくなりまさり
給へともいまは三条のうへの御はら
にわか君ひとり二の宮の御かたにも
わかきみ出きさせ給ひておりゐの御
かとは世にありかたきまてもてなし
いつきかしつきたてまつり給へるも
かたくけなくすくせのほとも口おし
からすと思ひ給へはいとゝほいをとけん（二九オ）
ことはかたくのみおもひなされ給ふ三位
のはらの若君いまは四位のしゝうと
て當代の御門むつましきものに
まつはさせ給ふにかたちもいとおかし
けによういありてちゝきみの御わかさ
かりおもひいてゝ物はつかしけにおはす
れはわかき女房なとそたゝろに心けさう
もしおかしき御ありさまとそおほえけ
るふちつほの御はらに若宮三人おは
しけるすき〳〵にいときよらなる（二九ウ）
御かたちともは人の御かとのためしにも
ひきいてつへくおはしましけるそう
れしき事とおほしの給ひける一の
御子は春宮おり給へは御かわりに
ほうになり給ひ二の宮はむかしの御
れいとやおほしよりけん兵部卿と
そきこえける三は花中くわ王とて
とりわけ御門きさき御いとおしみふかく
かしつきたてまつり給ふやよひ十日
あまりなんてんのさくらいつれのと（三〇オ）
しよりもおもしろかりけれは御らん
しすくしかたくて桜のえんせさせ
給ふその夕部より三の宮なやみ
たまひてあくるとら一にともし火の
きえいるやうにてほうきよなりしかは
御かときさき御なけき申も中〳〵にそ侍る
これはうちのおとゝのこさいしやうのはら
の姫君かたちよききこえありて忍
ひ〳〵御こゝろさしありしかはおとゝも
あらまほしきことこそとてへいちなと（三〇ウ）

出させ給ひてほいのことくありしを
かく思ひわするゝやまふなとゝいふ事
さへなくかくなり給ひたる事とてこ
かれ給ふほとに五日はかりやおはしけん
同し道になり給ふおとゝ又なけき
給ふ事かきりなしさらぬたに此世は
夢とのみおもひ給ふをかゝる事をさ
へ見給へはかたときもかくておはせん
ともおもひ給はす上よりいとこまか
なる御とふらひともきこえ給ひて（三一オ）
こをおもふなみたもおなし涙にて
なかむる空もおなしけふりか
まことにいかなるちきりにてかとあさ
ましく思ひつゝけ給ひてかくなむ
子をおもふ涙の川のはやきせに
しからみとなるきみかことのは
かくてあかしくらし給ふにさらにうつ
しさまにて世をすくさん事いとうたて
あるへしことに三條のうへもおもひすまし
たまひしを一ふし心えぬと思ひしに（三一ウ）
よりたとへつみをわふともとおもひな
してかくはおもひなりにしなり一君はは
やすきし一よのありさまを見るに一時も
たのむへきにあらすまたたとへありと
もさのみらうしはてゝはおこなひも心の
かきりはかなはしなとゝ思ひとり給ひて
にわかにかのそうつをさうし給ひてむ

＊小川注・和歌であるが字下げなし

かしいまの御物語なとの給ひてさて
も我むかしより此世に心とめしと
おもひとりしをかた〳〵すてかたき（三二オ）
こととはんへりていままてかくて
すくし侍りあまさへこゝなる人かし
こくおもひとり給ひし道をさまたけ
あるましきこととはおもひなからしは
しかほとかくてさふらはすかへす〳〵
一たんのこゝろをはらはんかためなり
ことさらかくまのあたりにうきことを
見すてしより一日もありかたかりしを
けふまてすくしけるもつらく侍れは
いまは我も御てしにまいり侍らんこゝ（三二ウ）
なる人もおなしくもろともにとの
給へはそうつすしやうなる事にて侍
れともおほやけもさなからたのみた
てまつらせ給ふ事なり世をも人
をもうらむる御心にてこそさる御
さまにもなり給へはいまはかくきん
たちなとおはするにかへりて佛の
御心にもたかひやしたまはんとお
もひ侍るいかゝときこえ給へはそ
れは此ほと折〳〵申きかせ侍又（三三オ）
よのあちわひも心えはんへるほと
にいさゝか残る心はんへるましかやう
の事ひろこりとゝこほりぬれは
かならすさまたけらるゝ事おほく

なんとく〳〵ときこえ給へはさてはとて
かうそりとり出しゐん事うけさせたて
まつりすけのくとくのいかめしきことは
此山里にてもくわしく申きかせた
てまつりしなりいさゝか御心をう
こかひ給ふへからすおとゝ申は何人か（三三ウ）
きてもうそうのしうしんをはなせる
そ我身はまたいかなるものなれはあ
いしやくのほたしにさはりて此人
間にはすむそとよく〳〵しゆいめ
され候はゝやすく御さとり候すると
きこえ給へは
　とをからぬむねのあひたの法のしを
　山のおくまて何もとめけん
れいのさまにいたゝきはかりそり
給ふをみつから御くしをきりいたし（三四オ）
たもふとて
　そりすてん心のうちのみたれかみ
　とく〳〵すてぬことそくやしき
とありけれはおとゝも御心ゆくそ
うつもまことにすしやうなる事と袖
をぬらし給ひけるそれよりそふ
かき心さしおはするはまろかしらには
なり給ひけるおとゝもおなし
さまになり給ひてそのばやかて
よかわにおはしましてかいの御ふせ（三四ウ）
たてまつり給ふとてさてもかゝるこ
とのたやすくうへき事一しめし
たまはらんとありけれはそうつ
　ふみなれぬその山道をたつね見よ
　ゆきなはつゐにさとはあるへし
おとゝ
　山のおく山のおくとてたつねしは
　心のおくのさとりなりけり
そうつもいとたうとき事と返す〳〵
此世にいさゝかかへり見給ふなと（三五オ）
申たまひて
　あるものと人をも身をもおもふなよ
　こゝはかりなる夢の世の中
おとゝあな口おしやこはいかにとて
　ありなしといふまてはなをあるかたち
　有無をはなるゝ心とをしれ
とてつゐに行かたなくれいしうの
いけのそこには千秋の月をもて
あそひしゆふくのそのゝほとりには
万歳の友をあいし大非の光は（三五ウ）
三こうの露をせうす大慈の月輪
六しやうの霞をちらす秋の月を
もてあそふともからは無常の風に
さんらんし春の花をゑいする人
はもゝそのゝ雲にめつすふようの
おんしやくはてんへんのそらにさんし
らんきくのよそほひなるすかたは無
しやうの風におとろへ大慈のしし

やくはこくこうのせんりんをよはふ
大ひのやうかくはむみやうのこうを（三六オ）
くたくむひのよもははかいの風をふか
すうろ六ちんはゑとの衆生を道ひく
露の命はきえやすししゆつせき
の火のことしふるきやとにはとゝまり
かたしさんとうの水ににたりとなん
くわんし給ふまことにありかたき事
とそ世のためしにも申つたへ侍り
けるとなん

ひはりこ

世の中いと物さわかしくあらましかは（三六ウ）
とおもふ人のみおほく戀かなしみたて
まつり給ふ事かきりなしおとゝの
二の宮の御はらの少将の君むかし
おほゆる御ははいとなつかしけに
てかの三條のきみたち心すこけに
おはするを心くるしき物にこのか
み心にあつかひ給ふをそよそ人も
あはれにかたしけなき事におもひ
きこえける弥生の十日はかりにや
ありけんさかの院にまうて給ひてか（三七オ）
へさに御ともなる人〳〵にとをや
ともいさせて見給ふにむら草の
中よりひはりのなきのほるこゑいと
はかなくきこえれは

いつくをかやとゝさためてひはり子の
この草むらをなきて出らん
むかし此野にて小鷹かりし給ひし
日暮いたうふりしに左衛門かみか
みつからひとりにもつもる雪かなと
いへるをきゝ給ひてこおとゝのゑい（三七ウ）
し給ひしそかし

おしなへてつもるみゆきをなとされは
わか身ひとつときえわふるらん

おはしますともいまたともかゝみにはなり
給ひしものかほかたち見にくかりし
さへ見るほとはつきなくは見えさり
しそかしさもなまめかしうゆふなり
しかたはすくれ給ひし物をおはせま
しゝかはいかにかひあらましなとゝ
おもひうんし給ふ折ふしかりなきて（三八オ）
わたりけれは

雪きえしあとをしたへはおしなへて
此世はかりとつけわたるかな

かへり給ひてもむかしの御おもかけいと
そひたるやうにてすゝりはこをまくら
にて打ふし給へるにうるはしきかうの
ほうふくとうきやうきんとおほしきけさ
かけ給へる人やゝとおこし給ふをた
れそといひて見るにありし御
けはいいさゝかおとろふる事なくて（三八ウ）
ひるのかへり事とおほしくて

おしなへてかりとさとらはとくすてゝ

心すゝしきくわゝむまれよ
御返事申さんとするとおもふほとに
夢さめぬさてはひるの野にもあま
かけりてきゝ給ひけれといとゝ此世を
かへり見給ふほともありかたくいかてこ
の世をはやくすてよとの給ひし
心をきゝとゝけたてまつらんされとも
御あともあらしはてん事はなこりも（三九オ）
かなしくなととそなん
八はし
うちの御門よりけいきん上人に八
しうにはいつれにたよりてかはやく
もとつくへきとたつね申給へは
上人
なにせんにその八はしをもとむへき
いつれもひとつたゝ心なり
いつくよりむまれおはしていつくに
御かへり候へきとそれをたにまつよく（三九ウ）
御らんしめされ候はゝやすく御さ候へしい
つれのしうも道はたゝひとつにて候
くらき夜にも三千世界を見るに
まなこにては見す候たゝいまの
御くらゐにてまし〳〵候とも此むね
をたゝ御心かけ候はゝへつに一大
事と申事はあるましく候釈尊
も位よりの御さとりこそつゐに
とゝき申て候へとそ申あけさせ給
ひけると云々（四〇オ）
六帖の終
源氏六十帖之内五十四帖は世間
にるふす此六帖は源氏かくれ給ふ
事共あり其上此奥書をこめ
たる巻々なるによつて禁中ニて
深く秘事したまふ故に世人是
を不知者也奥ニ内侍のかんの
君と云人當代禁中一の哥人
たりいにしへの小町と云とも是には
しかしとそきこえししかあるに（四〇ウ）
より此巻々ニ至るまてこと〳〵くゆ
るし給ふとそかゝりける所に不
慮に左迁の災あり天文初の
比ほひ肥前高來郡になか
され給ふ都御出の時此巻ひ
そかに身にたつさへもちくたり
給ふを色〳〵戀望つくし書
写ものなり後覧の人これを
おもんすへし〳〵秘すへし〳〵
右有馬越中入道徳円御（四一オ）
本以書写者也
元和四年三月三日

〔付記〕貴重な御蔵書の閲覧調査、翻刻をおゆるしくださった堺市立中央図書館および関係者の方々に深謝申し上げます。